

令和4年度 第1回 国産材の安定供給体制の構築に向けた 中部地区需給情報連絡協議会 議事録

- 1 日 時：令和4年6月9日（木）10：00～12：00
- 2 場 所：ウェブ会議（Zoom）
- 3 出席者：別紙のとおり
- 4 議事次第及び配付資料：別紙のとおり
- 5 概 要

（1）冒頭挨拶

○中部地区需給情報連絡協議会 鈴木会長（株式会社 東海木材相互市場 代表取締役社長）

本日は、林野庁及び関係中央団体をはじめ各構成員の皆様には、大変お忙しい中、今年度最初の第1回中部地区需給情報連絡協議会にご参加をいただき感謝申し上げます。

昨年度は、対面形式の会議も開催をし、中部地区の抱える課題について活発に論議を行い、木材の適正価格や人材確保問題などについて、おおむね整理をされ情報共有できたと考えている。本協議会としては、国産材の安定供給体制の構築に向け、改めて具体的解決策を議論するとともに、林野庁への提案を行い、速やかに政策に反映するよう取り組んでいく必要があると考えている。

さて、昨年2月から3月にかけて起こった外材高騰から約1年余りが過ぎ、入荷も順調に進み、内地材の生産も増加してきた。今現在は不足感から過剰になりつつあるが、価格的には現状を保っている状況にある。

しかしながら、国際情勢の悪化等によりこの先の需給動向に不安を抱える中、お互いに知恵を絞ることで、生産者や需要者などへの利益の再配分を可能とした川上から川下への流れを加速する仕組みを構築できるのではないかと考えている。以上、皆様の活発な議論を期待し、実りある会議となるよう祈念し開会の挨拶とする。

（2）議事

○信州大学農学部 植木 教授（以下、座長）

本日は、今年最初の連絡協議会となるので、よろしく願います。出席者の紹介については、先ほど事務局から配付された名簿をもって代えさせていただきます。本日の議事内容は、1つ目が需給動向について、2つ目は国産材の転換等への支援についてで、他にも何か議題があれば提案していただきたい。

それでは、まず、輸入や国産材の需給状況についてであるが、前回は12月から1月にかけての状況を共有している。そのあたりで、議論はやはり木材に限らず、住宅設備とか合板の不足の影響によるものであったと思っている。その後、2月にはロシアのウクライナ侵攻によって一部の木材が輸出入禁止となる状況も生まれている。今後の木材需給の動向が注視される中でいろいろ不透明な状況にあるが、特に林野庁から関係資料を提供いただきながら議論していきたいと思っている。なお、前回議論の中で出てきた課題を1つにまとめてみると、サプライチェーンマネジメントの再構築をどうするかということで、これは、ずっとこの会議では議論してきている課題である。具体的には、前回の段階では、スギの素材価格を上げないと山元への利益の還元ができないということ。皆伐再造林の実施を今後も、積極

的に行っていく必要があることであった。ところが、川上のほうからは、事業地確保がなかなか困難であるということと労働力不足、それから経営計画の策定がなかなか進まないという山側の事情もあるということであった。そのために、なかなか安定した供給ができないというのが1つの議論としてあったと思う。

○林野庁 木材産業課 長谷川木材専門官

資料1～4、参考資料1～2について説明。

○植木 座長

林野庁の説明を簡単にまとめると、輸入量については昨年後半から回復傾向にありその後は現在も大きな変動がない。ただ、ウクライナ侵攻の影響で一部木材の輸出入禁止などがあり、今後国内の木材需給動向に影響が出る可能性もあるということである。この点に関しても、引き続き注視すべき状況にあると言える。また、国内においては輸入材、国産材ともに価格が高止まっているが、構造用合板については価格上昇が今なお続いている状況である。ただ、原木入荷量については長期的には増加傾向が見られるということである。

それでは、ここから少し議論を情報交換という形で意見を伺いたい。全体的に言えることであるが、まず全国的な情報として、中部地区との違いも含め構成員の皆さんからその現状及び見通しについて聞きたいと思っている。まず川下のうち建築事業者の方々においては、前回開催時の12月時点比較した場合、部材の入手状況や合板の確保状況はどうか。また、新規の受注状況や価格の転嫁状況、木材調達の今後の動向見込み、さらには輸入材から国産材への代替等の状況等について、ご意見をいただきたい。

○一般財団法人 日本木造住宅産業協会 藤居事務局長

私どものほうは、住宅販売という立場で現状を申し上げる。まず受注及び販売状況は、基本的には各社前年並みで、落ち込むこともなく販売自体は概ね順調に推移をしているとの回答を得ている。販売価格については、概ね5%から10%の上昇で、お客様に提供しているところが多いようである。また、今後についても、各社とも販売価格はさらに上昇する予測を見込んでいる。木材の供給状況については、各社とも安定的に供給はできており、年内までは確実に見えているが、それ以降の供給については不透明な部分はある。価格面では、高値ではあるが安定的に受注に繋げている。一方、木材以外の供給状況について、設備関連に関しては商品によって供給不足、入荷が遅延する事が現実発生しており、実際に品目を例に挙げてみると、室内の暖房乾燥機や食洗器、照明のダウンライト等の入手が困難になりつつあるという回答を得ている。この状況の中で各社は、契約締結に向け、国策でもあるZEH、こどもみらい住宅支援事業等の助成金により、お客様に積極的にアピールし、販売を行っている。

○全建総連北信越地協・長野県建設労働組合連合会 吉田書記次長

私どもは、長野県で大工、工務店を中心に加入している組合の長野県の本部である。ウッドショックと言われてもう1年以上経過するが、当初はやはり木材価格が高い状況であった。先ほど発言があったように、今設備関連のものが非常に手に入りにくい状況で、木材に対する考え方が少し変わってきたというのが現状で、今は高値安定になっているが、お金を出せば何とか手に入るという意識が変わってき

ている。ただ、設備関連、給湯器、食洗器、トイレ等々は入りにくい状況だということを国からも聞いており、絶対数が非常に少ない中を取り合っている状況で、木材に対しては一時期よりは危機感が少なくなりつつある。また、家を一軒建てるのに対して、設備関連や資材全般に対して価格が高騰してきているので、全体的に見て木材だけの問題ではなくなってきたというのが1つの大きな印象となっている。さらに、その中で行政の方では県産材への利用に対する補助金等の助成制度を設けており、今までお付き合いのある製材業者さんとの関係など難しい状況もあるが、この機会に県産材を中心とした国産材に目を向けてもらうような働きかけを一緒にしているところである。

○植木 座長

ただいま、2つの事業体から川下の状況を聞いたところで、基本的には木材の高値安定の状況の中にあって、販売は前年並みか、それなりの順調な推移をしているが、今後ともやはり価格の上昇が見込まれるということである。それから、木材供給の面では、やはりどうしても不透明感はあって、そうはいっても、一応高い値段、価格でありながらも手に入る状況ではないかと。むしろ深刻なのは設備状況の方で、物によっては一部入手が困難になってきている。木材価格が高いという問題だけではなく、設備機器関連の不足、これが絶対的不足というか、それがむしろ足かせになっている状況である。最後に、県産材、あるいは国産材への働きかけを積極的に行いたいというような発言など川下からの状況を伺った。

ただいまの発言内容について、特に、川中のほうから、国産材へのシフトといった意見も踏まえて、ご意見を伺いたい。

○一般財団法人 愛知県木材組合連合会 西垣会長

私のほうからは、植木座長をはじめ皆さんの発言をお聞きして、現状では当たっていると思う。今年でウッドショックも約1年近くになったが、木材の流れを見ると高値安定になっている。また、名古屋港では3月ぐらいから、短期間で輸入材が大量に入荷しており、どこの木材業者も在庫が目一杯でこれをどうこなしていくかが、これからのやりくり次第となっている。

今、特に外材への依存度が日本の場合は高いことから、その流れで行くと第3クォーターが7月、8月、9月積みの契約がヨーロッパでも進んでいる。先週から始まった羽柄材は非常に強気で、入荷量が少なく価格交渉が量も伴いながら非常に難航している状況である。我々木材業界としては、今高値の輸入材が入荷しているので、その消化で必死だということである。ただ、入荷量が今まで以上に一気に来たということで、もう安くなければ買えないという状況である。円安とユーロ高で今日も143円だと言われているが、それが非常にネックにもなっている。さらに価格交渉は、来週から桁材や柱材、レッドウッド、集成材と始まるわけであるが、やはり先を見ていると我々日本側としては、安くした今までどおりの単価で、相手側は1㎡当たり四、五千円上げてくるという状況で、買えないという状況が続いている。私としては、こうした流れの中で、外材の7月、8月、9月の価格と入荷量の状況から、国産材がその動きにどう対応していけるのか、今後も注視していく必要があると思っている。

次に、入荷に関して、針葉樹合板においては名古屋港でもロシアのウクライナへの侵攻による影響か分からないが、中国からの針葉樹合板がもう4月頃から、パーティクルボードまでも入荷している状況にある。これについては、品質上の問題が指摘されているが、毎回入荷の量が増えてきており、今針葉樹合板は700円であったものが2,000円まで上昇しており、半導体など設備関係の供給不足と同様に、

先行きの不安感があると思っている。

○植木 座長

外材、特に欧州材の強気の単価により、今後我が国への輸入材は安くはなりにくいという意見が1つあると思う。また為替の影響もあると思うが、やはり国産材へ目を向けていく必要があるだろうということが1つ。それから、中国からの針葉樹合板が非常に高くなってきているということである。

それでは、川中の状況について、現在の生産状況、原木の確保、特に前回も材が入ってこないという不安な声が大変多かったと思うが、現在はどのようになっているのか。特に、国産材の入荷量についてお聞きしたい。それから、生産体制や安定供給体制の構築に向けての取組等について、お願いしたい。

○ウッドリンク株式会社 吉田製材事業部長

原木の状況については、今、伐採等の時期でもあり順調に入荷している。現在は価格も上げ原木の確保ができています。生産状況については、フル生産となっており国産材を利用する事業体向けに生産している状況にある。販売についても同様に、生産された量はしっかりと販売できている。逆に、外材製品から国産材製品へシフトするハウスメーカーさん等、多くの方々からの要望等が出てきている。

しかしその反面、住宅着工戸数の推移などからみると、今後の需給動向については依然として先行への不安感を抱えている状況にある商社などの関係者からの意見が出ている状況にある。

○植木 座長

何とか原木は入荷し、製品も供給できている。販売も順調に進んでいると思うが、国産材へのシフトに関して要望は多いが、安定供給の面で不安があるということである。今後、外材の価格が上がる可能性もあるという話を西垣さんからも伺った。やはり国産材への期待というのは出てきているという話だが、そこで先行きの不安感があるというところの最も大きな理由というのは、どういったところだと感じているか伺いたい。

○ウッドリンク株式会社 吉田製材事業部長

私どもは、やはり住宅関係では施主さんが価格の上昇により発注を見合わせるような状況により、住宅着工戸数が減っていくのではないかと懸念をしている。そういったときに、やはり、ヨーロッパの住宅着工戸数も、アメリカの金利も上昇し着工戸数も減少した。ヨーロッパの方は、現在はロシアやウクライナ情勢の悪化により同様の状況で、その分日本に対する着工戸数への懸念材料があり多少減るだろうと思う。また、外材製品の入荷により、荷余り感というのが出てくることから心配している。

○植木 座長

供給の関係が、着工戸数が伸びない1つの原因にもなる可能性があるということ、それに加えて先ほども吉田さんの方から設備機器の入手困難性という発言からみても、消費者が家を建てたいと言ったとしても、かなり困難な状況が今後も引き続きあり得るという意見を頂いた。

○ファーストウッド株式会社 西村購買部次長

弊社ファーストウッドグループは、飯田グループの分譲建売住宅向けに自社で集成材の製造、プレカット、そして国産材を使ったLVLの製造を行っている。コロナ禍直後から直近に至るまで、いまだ分譲建売住宅の需要は旺盛な状況で、販売も好調を維持している。

こうした背景の中で、プレカットという観点でみると、躯体、羽柄についてはある程度充足されてきている一方で、合板が大きなボトルネックになっている。このことにより、プレカット事業としては依然非常に厳しい状況であると言える。

このほか、国産のスギを使いLVLを製造しているが、こちらもうまく活用しながら何とかプレカット躯体をグループ向けに供給しているところである。一方、輸入材に目を向けると、去年の12月、1月あたりに、入荷の遅れていた欧州材が一気に入荷し、いまだ港に滞留している状況である。

おそらく他にも、このような「輸入材過多、合板不足」という状況は同じではないかと思う。一方、我々、グループ内のビルダーが供給先になるため、使用部材のスペックについて、ある程度間口を広げてもらい、様々な樹種や商品を使えるようにすることで、供給責任を果たすことに努めている。

また、皆さんご承知の通り去年の12月にRussia Forest Productsを子会社化した。弊社の昨年度の購入実績でまだ20億程度の取引規模であるので、弊社の購入量全体に対する割合でみると、影響はほとんどないという状況と言えるのである。

依然として厳しい状況の中、目の前の着工物件に対して、合板をきちんと確保しつつ躯体を供給していくことが課題である。

○植木 座長

先ほども発言があったが、やはり合板不足の問題が大きく、今後もこの状況が続く1つの大きな課題となっている。ファーストウッドさんは、LVLという商品は国産スギを使っているということだが、前回、スギの価格がいま一つ伸び悩み、もう少しスギの価格が上がれば山主さんへの還元も可能になるという発言があったが、スギの入荷量や価格については、どのような状況なのか伺いたい。

○ファーストウッド株式会社 西村購買部次長

価格については、一時は価格の右肩上がりの高騰が続いたが、高止まり以降今は高値安定の状況と思われる。集材については、順調に進んでいる状況にあるが、一方でやはり東北エリアでは原木の取り合いとなっており、色々な事業者の方々からの需要が多く、現在集材に力を入れているところである。

○植木 座長

スギの価格は、最近高値で推移していることはよく聞くが、現在は高止まりの状況にある。ただ、供給面では何とか順調に進んでいるとういことだが、やはり安定供給がどこまで頑張れるかにある。今の状況を見ると、川中、川下の需要というのは今後も増加が見込まれ、それに対し川上がどのくらいカバーできるかが課題であると見ている。

○征矢野建材株式会社 岩垂取締役統括本部長

弊社では、アカマツ、ヒノキ、カラマツ、スギ、その他広葉樹という多樹種の原木を取り扱っている。まず1点目のアカマツは、シーズン物でこれから夏になると原木も集材できなくなり、昨年比で大体

1月から4月で2,000 m³強の不足で、予定通り集材できなかつた。当然価格もありきという形だが、全体的にアカマツの需要が高まっており、競合他社においても、チップから始まり合板、製紙会社等もあるので取り合いになったことが要因になっている。2点目のヒノキについては、プレカットにおいては、土台加工から始まり、下地材、構造材など、部材もあり確保はしているが、先ほどから皆さんの発言の通り、ヒノキもやはり高値という形で推移していたが、若干落ち着いてきたと思っている。3点目のカラマツに関しては、やはり長野県の針葉樹であればカラマツで取り扱いも多いので、合板メーカーさん等にも当然回っている。また地元の製材にも供給したり、集成材のラミナも昨年から少し供給したりしていたが、やはりこの4月からかなり単価が上がったことから、集材のほうもなかなか安定しなかつた。

最終的に一番ボトルネックなのは、やはり製材製品、構造材も同様に、なかなか価格に合わせたように転嫁できていないというのが実情で、集成材、構造材を製造しても、レッドウッドとの集成材や米松についてはかなりだぶつき感が出てきていて、先ほど西垣会長の発言にもある通り、東京港の17号地でスギの14万m³の在庫が、今は17万から18万m³になっており、だぶつき感が生じており、当然土場に置いておけば、その分倉庫賃等もかかってくる懸念材料があるが、今後は単価を下げてでも出荷していく事が起きてくるのではと思っている。そうすると、部材がない中で、構造材、内地材も含めて、やはり価格競争になってくると厳しいところがあるので、仕入れは今後冷静に判断したいと思っている。

合板については、皆さん言われているとおり中国のJAS製品のオファーがメーカー、商社を通じて来ている。西垣会長も言われていたが、やはり買入れについて躊躇している状況にあり、過去に東北の震災時に東北の合板メーカーが稼働できなくなり、商社、問屋等が中国産の合板をかなり買入れしたが品質上の問題から、失敗したということがあるようで、なかなか買入れも難しい状況にある。やはり、JAS製品であっても、パンクしていたり波打っていたりすると、内装材に使えないとことになってしまふ。最終的に顧客満足度を上げるためも、現状では手が出せないという状況にあると思っている。国内でもロシア材の単板がない以上は、やはり内地材で生産を進め、プレカットにつなげていくという形になることから、それも併せて進めている。

着工については、現地で弊社の方は6月期、7月期は、大体100%を超えているが、これは春先からの住設関係等の遅れもあって、ずれ込みで100%超えているという形もあることから、最終的には個人的には自社の中では10%ぐらい着工が落ちるとは思っているが、いろいろな施策通じて内地材の利用を進めるとともに、安定した部材供給に取り組んでいきたいと考えている。

○植木 座長

征矢野建材さんでは、様々な樹種を扱っているが、その中でも少しだぶつき感が見えるものも出てきているようである。カラマツについても値上がりが続いているということから、全国規模の需要に対応しているけれども、地場の製材所等には納材量が激減しているというような話もあるが、地域の製材工場の経営はなかなか厳しいとの見方は、如何お考えか。

○征矢野建材株式会社 岩垂取締役括本部長

やはり仕入れ単価の上昇が、なかなかそれに最終製品まで追っかけるという形になると、製品の方で価格転嫁できない状況があるので、原木価格も仕入れでどんどん上げられるかという形もあることから、それで価格競争で負けてしまう。また、カラマツに限らずスギ等も、また合板も足りないという形で色々

な原材料が不足しており、価格競争の末という形でなっているのが現状である。

○植木 座長

地域経済にとっての地場産業というのは非常に大事だなと思っているが、これだけ原木入荷が厳しくなり、不安定な状況が出てくると、どちらかといえば価格において強い弱肉強食的なところが出てくることに不安がある。そうすると、大手企業は原木を必死になって確保できたとしても、地場産業の将来はどうなっていくのか不安に感じている。

○長良川木材事業協同組合 神垣係長

我々は、岐阜県の郡上市でスギとヒノキをメインに製材しているが、足元の状況をみると新年度に入り、長い冬を越えて天気もいいということで、原木の入荷は順調で、原木在庫の方も、やっと製材量の1か月分を確保でき、何とか安心しているところである。今後も、国有林の伐採が始まるなど、素材生産のほうも順調に進んでいるということで、秋口までは順調な納材があると聞いている。

ただし、工場のほうは、原木の入荷増に伴い、製材量を増やしていきたいが、人手不足や働き方改革による残業の規制もあるので、その辺りでの稼働制限が出てくると予想されており、工場も何とか頑張って製材をしていきたいと思っている。

製品の販売は、グループ会社である中国木材の販売網を通して今のところは何とかできているが、やはり住宅着工戸数の先行きについて不安感もあり、倉庫のほうは若干ひっ迫感があるということなどは聞いている。樹種別で行くと、ヒノキはだぶつき感が強く、この辺り値段で調整するのかが量を調整するのは、グループ全体で考えていく必要があると思っている。

○植木 座長

長良川木材さんは、比較的安定して高い水準で来ているということのようです。ただ、やはり労働力どうするかが課題である。これは、どこでもそのような労働力不足というのは頭の痛いところと思っている。

○昭典木材株式会社 峰野代表取締役

弊社は、大工さん、工務店さんを中心に小売を中心とした製材を行っている。現在は、設備の増築などにより生産体制を増やす努力もしているところである。今、感じているのは、国産材の値段は高いと言われているが、木材業界の方々が今ぐらいの値段が適正価格という感覚になっていただき、今後はこの程度の安定した価格で推移していくと、川上側の生産意欲が沸いてくるのではと思っている。もう一つは、安定した取引で安定供給することが大変大事であると思っており、その中で皆さんと同様に不安要素を私も持っており、外国産材が高い状況が続く、また国産材も本当に近年になく値上がりしている。これを何とか維持していくための努力も必要であり、安定した品質で安定した量を生産していくということが国産材に求められているとは思っている。

ただ、その先にある安定してつくったものを安定して販売する、買い取ってくれるという仕組みをどうやってつくっていけるのか、今、私の中で思っている課題である。特に、外国産材が大量に港に入荷してきて在庫はだぶついているという状況の中、国産材を増産しても大丈夫なのかなという不安を何か

払拭できるような政策とか方法とかがあるといいなと思っている。外国産材は、大量に港に置けるけれども、国産材はなかなか買い置きしてストックするという制度が今はないのかなと思っており、ある程度安定的に買い取りし、ストックしておく場所があると安心して生産できるのではないかと思う。

○植木 座長

今、適正価格の話も出たが、今の価格が決して高くはなく、むしろこれぐらいで推移が期待できればということである。私も別件の情報はであるが、今の価格ではまだ十分ではなく、もう少し上昇を希望する素材生産業者や製品関係者も言っているところもある。それぞれの業態の事情を踏まえ適正価格の問題をどうしていくのか、今ではとても高いと消費者から見れば高いだろうが、川上側からすればまた違った意見も聞こえてくるわけである。

また今も話に出たが、外材がもし今後とも順調に入ってくるならば、そのだぶつき感から国産材へシフトしていいのかという不安感。私自身は、やはり国産材を使うことによって森林の再生による持続可能性、経営の持続可能性、環境問題への貢献というのがあるわけで、そういう意味では国産材、地元材を大いに使うべきだと思っているが、買う側としては、そのようなやはり安定供給面からの外材の利用もありうる。そうした場合に、国産材の安定供給はどうすべきか。あるいは、ストックすることでどのように流通させていくのか、結果的にはサプライチェーンの問題になってくると考えられ、この辺は、やっぱり林野庁としても十分考えておく必要があると思う。

国産材時代と言われ、国産材を使うことが地域経済、あるいは環境にとって良い事と声高に言われているが、それをどう実現するのはまだまだその施策的なところも足腰が弱い。それから、地域の流通、加工面においてもサプライチェーンの問題としてもまだしっかり確立できていないことから、また外材に流れてしまうことはあり得るので、これも課題と思う。

それでは、集成材の片桐銘木工業さんのところは、どのような状況にあるかご意見を伺いたい。

○片桐銘木工業株式会社 片桐代表取締役

私どもは、スギ、ヒノキの大断面構造用集成材を取り扱っており、一般流通材と違い愛知県や近県にかけての公共物件に対して供給をしているところである。その中で原材料を製材からやるのではなくて、製材工場でラミナを挽いていただき、そこから生産をしているという状況で現在に至っている。当然、原材料の価格は前に比べて原価である材料が値上がっているの、販売単価も当然上がっているが、一般流通しているスペックとラミナとも違うので、製材工場さんと相談をして安定的にその物件に合うものを入れるように、長期にはなるが調達をしていただき商品をつくっている。やはり人材確保の問題、接着剤など材料である全てのものが値上りしており、単価の考え方というのが非常に苦慮をしているところである。

材料の調達に関しては、問題なく安心しており維持しているところである。それから、一部の構造用集成材には使わないもので内装材をスギ、ヒノキで作ったり、ロシア材など表面材としてロシアのタモとかを一部使っているが、紛争木材ということで当然入荷していない状況である。紛争前に調達したもののイメージダウンを心配していたが、紛争前と後できちっと管理をすれば大丈夫と聞いている。一般の住宅購入者の方が、紛争地からの木材として利用する場合、イメージ上少し心配にはなる場合もあるかもしれない。

○植木 座長

構造用集成材を中心に展開しているということですが、価格が高い中で製品は高止まって、それに還元できているというような話かと思う。

それでは、紙パルプ会社関係の方に伺いたい。大王製紙の池内さんから、紙パルプ関係の状況、現状と今後の見通しても含めて発言をお願いしたい。

○大王製紙株式会社資源・資材購買本部 池内係長

現在の紙の需要で見ると、ここ6か月位は対前年同月比で1.5%から2%程度の増加となっている。これは、去年がコロナの影響で大きく減少したこともあり、これから考えると増ではあるが印刷用紙や新聞用紙の需要は右肩下がりの状況にある。逆に、増えているのは包装紙で脱プラスチックの背景もあり、紙が読むものから包むものに役割が変わってきている。

製紙会社の中では、新聞をつくる工場、段ボールをつくる工場等が複数に分かれていることが多いが、弊社は、エリエールをはじめ家庭紙、新聞、段ボール全てを製造しており、これを総合製紙メーカーと呼ばれる王子製紙グループ、日本製紙グループ、大王製紙の3社が国内には存在しているが、1工場ですべてを製造しているのは大王製紙だけとなる。弊社では需要が見込める家庭紙等の製造設備を増やしており、国産材を含めた製紙原料チップとしての使用は今後も増やしていく計画としている。

輸入材を取り巻く環境としては、ロシアチップの一部が国内に来ていたこと、中国で大きなパルプ設備ができたこともあり、輸入に関しては需給バランスが今後崩れる可能性があると思われる。

パルプ原料は低質材に含まれるが、今後、ボイラーの発電設備も増えていくことで低質材需要がばかり増えている。A材、B材、C材が順当に増えていくのが本来望ましいと思われる。低質材の需要が増えているところで、山林からの出荷量についても増やしていただきたいという思いはあるけれども、この辺りを今後どうしていくべきなのかが今後の問題だと考えている。

○植木 座長

大王製紙さんについては、製品の種類によっては減少、例えば、印刷用紙、新聞用紙等の需要が減ってきている中でも全体の生産量は増加している状況である。また、B、C材は結構引きが強いが、A材の利用をどのように確立していくかという課題も提案をさせていただいたところである。

それでは、木材流通の方から東海木材相互市場の小森さんに現在の状況について伺いたい。

○株式会社東海木材相互市場 小森執行役員大口市場長

今の市況では、スギは高値維持、ヒノキは若干下がり始めたところで、今年度の4月、5月の取扱い材積では15%ほど増加しており、入荷自体は順調にきている。ただ、一番懸念しているのが、元木がかなり売れないとか値段が出ない状況にあることで、昨年から比べてスギの並材は約5,000円、ヒノキの並材が約1万円上げているが、弊社の平均単価を見ると1,300円しか上がっていない。それを考えると、元木自体がコロナ前よりも価格が下がっているという状況で、最近では浜間屋との話では、特にスギは並材よりも元木のほうが値段はつかない、逆に安いぐらいで、ヒノキですと並材が上がって元木との価格差がなくなってきたという状況で、わざわざ伐採に手間をかけて市場へ持ち込んで丁寧に極積み

をする、その価値が無いのではないかと言いつけている。中小の製材屋さんに頼いていただいている元木の扱いが今後非常に難しくなっている。ウッドショックにより木材が高くなつたが、元木の価値がなくなってきており、山元全体にお金を払えない。特に、中部地区は元木をメインとして木を見ていくので、その元木の価値が出てこないことを非常に懸念している状況である。

○植木 座長

高値安定と言われる中においても、特にヒノキ並材のA材の丸太がだぶついているが、逆にスギについては引きが強い状況と理解している。

こうした状況の中で、いかに山元に還元するかという課題、原木が安定して供給できるのも、やはり山元の方の力があれば労働力の確保もついてくるだろうとは思いますが、様々なところで問題が出てきているということである。それでは、西垣林業の西垣さんに現在の状況等について伺いたい。

○西垣林業株式会社 西垣副社長

弊社は、愛知県豊田市で製材工場を、そして名古屋市で製品の市場を運営させていただいている。まず製材工場の状況ですが、原木の入荷に関しては今のところ順調に入荷をしている。スギ、ヒノキともに順調に入ってきており、製品の販売については5月までは比較的順調であったが、6月に入って販売先からも価格の相談が入り出しており、荷動きが少し減速してきているようである。製品の市場については、荷動きが非常に悪くなっており、単価がウッドショックの影響もあって高止まりをしているということもあり、金額ベースで見るとある程度の売上げはあるが、物量という面では前年比10%以上減少という流れになってきている。

先ほど昭典木材さんのお話の中で、製品の販売の方について今後長期的な視点で見たときに、国産材を安心して製材して販売していく場所が重要だという指摘があった。ストックヤードの必要性であったと承知をしているが、製品の市場という意味では、こういうなかなか少し荷動きが悪くなってくるようなタイミングでは製材工場さんからの荷物を安定的に受け入れていくという機能がありますので、今はそちらの機能によって製品の市場に製品が流れてきているというようなことなのかなと思っている。今後の不安という意味では、いつまでもそれがずっと継続していくことはできない、だぶつきが大きくなってくると価格への影響というものが出てくるので、これを今後どのようにしていくのかは注視を見ていかないといけないと考えている。

○植木 座長

国産材の安定供給を長期的にどのようにしていくのかという意見がある中で、だぶつきの問題もあるので、その辺をどう考えていくかである。

次に、東信木材センターの小相沢さんからは、カラマツがかなり広範な需要となつてきていると聞いているが、どのような状況か伺いたい。

○東信木材センター協同組合連合会 小相沢代表理事専務

3月のウクライナ侵攻以降、原木は非常に価格が上がり出荷量も多いが常に足りない状態である。特に4月は相当売り上げたが、5月の連休で若干少なく、合板、LVL関係、非常に強い引きがある。なおかつ、こちらには集成材を取り扱う工場もあるので、そちらのほうへの安定供給も考えており、どうやっ

て出荷量を多くするか、今、頭を毎日悩ませているところである。値上がりしたものはいずれ値下がるので、この価格がいつまでも続くとは思っていないが、今は毎月値段が上がっている状況である。先ほどの発言された方と同様に、中国の針葉樹合板の問題として、今不足していることから値段も高いけど入荷してきている状況から、これが投げ売りを始めるような状態になってしまうと合板価格が下がってしまい、同時に国産のカラマツも下がってしまうことになるかと思うが、今のところは、当面、常に足りない状況である。

○植木 座長

カラマツが不足しているというのは、資源量の問題なのか、それとも、生産システムの問題なのか、どちらの問題か？

○東信木材センター協同組合連合会 小相沢代表理事専務

どちらかというとな需要が旺盛過ぎるということ、東信木材センター取扱の8割がカラマツであるが、注文が多過ぎる。

○植木 座長

注文が多い、なるほど。

○東信木材センター協同組合連合会 小相沢代表理事専務

値段も高いことから通常よりは多く生産できているが、まだ需要に対応できていないということである。

○植木 座長

次に、川上について、前年と比較して特に春から夏にかけての生産状況、今後の生産見込み、森林所有者の反応や意見等、また、適正価格の問題もあることから、その辺の意見も含めお聞きしたい。

まず、川上の岐阜県森連の渡辺さんに伺う。

○岐阜県森林組合連合会岐阜木材ネットワークセンター 渡辺所長代理

現状では、先ほど流通業者各社の方の発言にある通り、スギについては引き合いが強く、今後もそうした傾向に変わりはない状況にある。ヒノキについては、冬から春にかけて伐採ピークは終わったが、ここへ来て若干弱含みで、ヒノキの山からスギの山へシフトできるように連合会としてはお願いしている状況になっている。価格の居所の話も先ほどからあったが、この辺は非常に判断が難しいところで、山側としては非常にありがたいという話は聞いている。ただ、伐採経費の話が出てきており、切る側と所有者との考え方にギャップがある。森林所有者については、販売価格が上がっているので手取りは増えているが、森林組合系統としては請負で実施していることから、伐採費と燃料等資材の高騰などにより厳しい状況にあることから、原木の価格が高い分、伐採費を値上げ頂けるように話をしているところである。こうした所有者の意欲と森林組合の事業としての話になってくると、若干温度差があると感じている。

○植木 座長

川中の方では原木の安定供給を期待する声が多いが、岐阜県森連としては何かその辺でボトルネックになっているような課題はあるのか伺う。

○岐阜県森林組合連合会岐阜木材ネットワークセンター 渡辺所長代理

先ほど、東信木材センターさんからの発言にもあったように、出材自体は、コロナ以前の例年同等という出材量もしくは若干多い状況だが、やはり要望量が増えていることが全体の不足感を生んでいると思っており、これを解消するためには伐採量を増やすことだが、これも前年から課題となっている労働力の不足がなかなか簡単に解消できないことから、難しいと考える。かつ、今現在林業機械の購入は、長い場合発注してから1年以上かかると聞いているので、森林組合系統としても、伐採の方も増班していくことが困難なところで、さらに機械の更新も進んでいないと聞いている。

○植木 座長

いろいろと課題が多く、できるだけ出材して欲しいが、需要増には追いついていない。その理由は、労働力不足や機械の問題ということで影響を受けているということである。

では、長野県森連の芳川さんにも同様に伺いたい。

○長野県森林組合連合会 芳川副参事

先ほど来、本当に、川下、川中の皆さんの意見について参考になる中、外材の入荷が多くなっている状況について多くの発言があった。今後は、外材製品の入荷価格は下がらないだろうという話もでてくるが、余り過剰になり過ぎると安売りをしていくという声もあり、また川中のウッドリンクさんとか先行きの住宅着工戸数が見えないという意見もあり心配な面も出てきていると感じている。長野県では、スギの価格面においては高値という形で、カラマツにおいては、東信木材センターの小相沢専務から報告があったとおりである。特にカラマツにおいては、B材は合板、A材は集成材等に利用されているが、価格の逆転現象が起きており、また集成材関係においては製品価格に転嫁できないという状況も聞いている。先ほどの岐阜県森連さんの意見は、全く私どもと同じで、山側から原木の価格、昭典木材さんも言われた適切な価格は、非常に難しいと思います。その中において、やはり林業機械が以前は2,000万ぐらいであったものが、3,000万強に値上がりしている。入荷に1年以上も時間を要する中で、機械を更新しようと思っても、機械価格も値上がりしており悩んでいると聞いている。それと、最初、植木座長さんのほうから話があった地域の山側の状況について、一部の地域ではスギが値上がりしており、山側である山林所有者の方から、買ってもらえないかという声も出始めているのは事実で、買っている事業者もある。しかしながら、今買ってもそのうち下がる可能性があるかと心配して躊躇している事業者もあることから、今後の取組においては、非常に先行きの見方が非常に大切かなと思っている。

○植木 座長

岐阜県森連さん、長野県森連さん同様な課題を抱えているということで、特に、今まで出てこなかつ

た高性能林業機械等の価格高騰と入荷の遅延が、非常に不安材料としてあるとの発言があった。

このことについては、新しい課題であると思う。今後も山側の方にはいろんな課題がますます出てくるような感じはする。こうしたところが、多分、安定供給のための一丁目一番地であり、この辺を何とか解決しないと、また外材の方に利用が増えてくる可能性もあるという気もする。

次に苗木生産の方についてお聞きしたいが、愛知県林業種苗協同組合さんに苗木の需給状況等について伺う。

○愛知県林業種苗協同組合 高山

苗木については、愛知県内の森林組合等へ主に供給しているところだが、かなり余っている状況にある。スギについては今年度の植栽は昨年の2倍程度に増加し、スギを他県から移入している。その分、ヒノキが余っている。例年は20万本ぐらい出荷しているが、今年は18万本から17万本と減少している。従前実施していた造林事業による山の植林がかなり少なく、電力会社の鉄塔の移設等による植林でかなり苗木の出荷が多いが、来年度以降の植林計画が不透明である。愛知県の生産量は、17、18万本ぐらいあり、余力はあるが約30万本生産する能力があると思っており、今後の需要増に対応できるような体制は取っている。愛知県だけの場合かもしれないが、林業伐採による植林が多く望めない気がする。

また、愛知県ではスギの苗木が不足していると言ったが、全国的に調査をしてみても同様の傾向で、スギが足りなくヒノキが余っているという話が各県の林業種苗協同組合から聞いており、今年は、スギの入荷に6月まで苦勞したという状況である。

○植木 座長

苗木が余っているという状況ということは、山側では皆伐が進んでいないよう感じている。次に、長野県山林種苗協同組の秋山さんにも苗木の状況について伺いたい。

○長野県山林種苗協同組合 秋山事務局長

県内の状況としては、これから苗木の需給が非常に増えてくると思っているが、生産者さんの方に、どのように正しくその動向を伝えていけばいいのか悩みの種になっている。

○植木 座長

今日は、特に事業体の皆様からの様々な意見を聞いてきた。川上の方もかなり問題を抱えてきていることが、明らかになってきており、説明いただいた皆さんに感謝申し上げる。

それでは、林野庁からいろいろな緊急対策事業が出されていることから、その内容について説明をいただきたい。

○林野庁 木材産業課 長谷川木材専門官

資料5～8について説明。

○植木 座長

ただいまの説明内容について、何かご意見、ご質問等をお願いしたい。

次に、マーケットインによる安定供給体制強化促進事業が公募されているようで、サプライチェーンをどのように構築していくかであるが、この件について、木材総合情報センター永井さんから説明をお願いしたい。

○(一財)日本木材総合情報センター 永井調査役

全国で7か所の地域を採択する予定で、1地域450万円の助成を考えている。内容としては、各地域でそれぞれの課題となっている問題点を解決するために、グループで集まり課題解決をしていこうという地域について助成をするもので、6月17日までが締切りで、皆さんご検討いただきたい。

○(一社)全国木材組合連合会 田口常務理事

先ほど林野庁の長谷川専門官からお話があった国産材転換支援緊急対策事業については、全木連のほうで対応させていただく。ホームページ等でいろいろな情報を提供させていただくので、引き続きよろしくお願したい。

○植木 座長

特に今日の議論については、まとめることはしないが、いろんな状況の中で激しい需給動向が続いている。その中で、これまでの課題に加え新たな課題が出てきていることが明確になってきたと思っている。そういう意味では、中部地区協議会としても何らかの形でこれを少しでも解決に向けた方向に進めればと思っている。また、6月21日には中央需給情報連絡協議会があり、この中でまたいろいろと議論されると思うが、これについてもその結果は林野庁から速やかに共有されることになっているので、皆さんもご覧いただければと思っている。今日の議題はこれにて終了させていただくとともに、出席者の皆様のご協力に感謝申し上げます。

(以上)